

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」  
平成 27 年度第 1 回研究会 報告

日時：平成 27 年 5 月 24 日（日曜日）午前 10 時より午後 3 時

場所：AA 研 304 号室

報告者名（所属）・報告タイトル

1. 児倉徳和（AA 研所員） 「趣旨説明」
2. 栗林均（AA 研共同研究員，東北大学） 『『蒙古語族語言方言研究叢書』内資料の電子データベース化について』
3. 山田洋平（AA 研共同研究員，東京外国語大学） 『『蒙古語族語言方言研究叢書』の証拠性の分析』
4. 海老原志穂（AA 研共同研究員，AA 研研究機関研究員） 「アムド・チベット語のエヴィデンシャルティとウチ/ソト」

-----  
1. 児倉徳和（AA 研所員） 「趣旨説明」

本プロジェクトの主査である児倉より、本プロジェクトの目的、進行、目標とする成果物の概要について説明を行った。

2. 栗林均（AA 研共同研究員，東北大学） 『『蒙古語族語言方言研究叢書』内資料の電子データベース化について』

共同研究員である栗林均氏（東北大学）より、本プロジェクトで扱う『蒙古語族語言方言研究叢書』の性質、電子データベース化に際して考えられる問題点についての報告が行われた。具体的な内容は以下の通りである。

- ・中国・河西回廊地域モンゴル諸語調査研究史における『蒙古語族語言方言研究叢書』

の位置付け

- ・『蒙古語族語言方言研究叢書』内の表記のゆれ
- ・栗林氏自身の資料入力状況
- ・モンゴル諸語検索システムの設計（検索キーの設計等）
- ・資料の権利関係の処理

栗林氏の報告を受け、本プロジェクトで作成するデータベースをどのような形式で作成するかの相談が行われた。

### 3. 山田洋平（AA 研共同研究員，東京外国語大学）「『蒙古語族語言方言研究叢書』の証拠性の分析」

共同研究員である山田洋平氏より、『蒙古語族語言方言研究叢書』内の証拠性に関する記述について報告が行われた。報告では、特に『蒙古語族語言方言研究叢書』の記述が用いる「主観」と「客観」という概念の内実を、同記述が提示する例を見ながら検討し、かつ記述で説明できていない現象をまとめた。

### 4. 海老原志穂（AA 研共同研究員，AA 研研究機関研究員）「アムド・チベット語のエヴィデンシャリティとウチ/ソト」

3. の山田氏の報告を受け、共同研究員の海老原志穂氏より、「アムド・チベット語のエヴィデンシャリティとウチ/ソト」という報告が行われた。アムド・チベット語を含むチベット語諸方言は証拠性（エヴィデンシャリティ）を表す文法形式が発達しており、3. の山田氏の報告した『蒙古語族語言方言研究叢書』内の証拠性に影響を及ぼしている可能性が考えられることから、本発表はアムド・チベット語の証拠性を検討することにより河西回廊地域のモンゴル諸語への影響を検討するために行われ、アムド・チベット語の証拠性について先行研究も含め紹介された。

発表後は 3. と 4. を含め総合討論が行われたが、ここで問題になったのは両言語間の影響関係というよりむしろ両言語の記述を踏まえた「ウチ/ソト」、「主観/客観」等の分析の不備であり、両言語間の影響関係を論じる前に個々の言語の証拠性についてのさらなる考察が必要との認識に至った。